

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 心理学 ）	氏名	高藤 真作
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目			
男性同性愛者のアイデンティティ発達に関する研究 ーカミングアウトと内在化された同性愛嫌悪に着目してー			
論文審査担当者			
主 査	教授 岡本 祐子		
審査委員	教授 服巻 豊		
審査委員	教授 石田 弓		
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、男性同性愛者を対象に、カミングアウトと内在化された同性愛嫌悪に着目して、そのアイデンティティ危機と発達プロセスを検討したものである。性的マイノリティに該当する人は人口全体の約9%を占め、社会の中に一定数存在していることが示されている。性的マイノリティは可視性の低いグループであり、ソーシャルサポートやロールモデルが得られにくいいため、肯定的なアイデンティティ形成には困難が予想され、臨床的支援を要すると考えられる。しかしわが国においては、性的マイノリティのアイデンティティ発達や臨床心理学的支援に関する研究は希少である。本研究は、同性愛嫌悪をより多く体験しやすい男性同性愛者を対象とし、青年期・成人初期の男性同性愛者のアイデンティティ危機と発達プロセスを質的、実証的に分析した。つまり、研究1では、カミングアウトに至る心理的背景とプロセス、研究2では、同性愛嫌悪の内在化とその変容プロセス、研究3では、男性同性愛者のコミュニティの特徴と他の当事者との関係構築のプロセスを検討することを目的とした。</p> <p>本論文は、以下のように構成されている。</p> <p>第1章「本研究の背景と目的」では、第1節において同性愛者の置かれた社会的背景、第2節において同性愛の歴史と社会の同性愛者のアイデンティティへの関心の推移を述べた。第3節では、同性愛者のアイデンティティに関する諸外国の先行研究を精緻にレビューし、同性愛者のアイデンティティ発達には、カミングアウトと内在化された同性愛嫌悪へ着目することが重要であることを指摘した。以上を踏まえて、第4節では、本研究の目的を述べた。</p> <p>第2章「男性同性愛者・両性愛者の性的目覚めから性的指向の開示(カミングアウト)に至るプロセス」(研究1)では、22-24歳の男性同性愛者・両性愛者10名を対象に半構造化面接を行った。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)による分析の結果、15のカテゴリーと32の概念が生成され、当事者の性的目覚めから性的指向の開示に至るプロセスが見出された。カミングアウトは、カタルシスや被開示者との円滑な関係構築の手段であること、内的動機づけだけではなく外的(環境的)な要因に左右されやすいことが示された。なお、両性愛者は同性愛者に比較して葛藤が少ないため、以下の研究2、研究3では男性同性愛者のみを対象とした。</p> <p>第3章「男性同性愛者の同性愛嫌悪の内在化とその変容の検討」(研究2)では、20-40歳の</p>			

男性同性愛者 18 名に半構造化面接を行った。M-GTA による分析の結果、対象者に共通した ①同性愛嫌悪の内在化のプロセスと、②内在化された同性愛嫌悪の変容プロセスが見出された。内在化された同性愛嫌悪による葛藤を、性的指向を否認・保留することで対処しつつ、他の当事者との関係を構築することによって内在化された同性愛嫌悪は低減されていくことが示唆された。

第 4 章「男性同性愛者のコミュニティの特徴と関係構築のプロセスの検討」(研究 3)では、23-34 歳の男性同性愛者 14 名に半構造化面接を行った。佐藤 (2008) の質的データ分析法による分析の結果、9 の大カテゴリー、31 の小カテゴリーが生成された。周囲に知られることやネットを介して出会うことへの危機感等の心理的要因によって、匿名性が高まりやすい、関係が継続しにくい等の同性愛者コミュニティの特徴が見出された。また、他の当事者との交流や性的体験から同性愛者としてのアイデンティティ感覚は深められるが、男性同性愛者のコミュニティでは希求する関係の相違による困難が生じやすいという、一般青年とは異なる関係構築のプロセスが見出された。

第 5 章「総合考察」では、第 1 節において本研究の成果をまとめ、第 2 節において本研究の限界と今後の課題について論じた。

本論文は、以下の 3 点で高く評価することができる。

1. わが国では研究が極めて少ない男性同性愛者を対象としたアイデンティティの発達に関して実証的な研究を行い、一般青年とは異なるアイデンティティ危機の特徴と発達プロセスを見出したこと。特に、カミングアウトと内在化された同性愛嫌悪が、アイデンティティ発達にとって重要なポイントであることを実証的に示したこと。
2. 男性同性愛者コミュニティの特徴と関係構築の困難さを示したこと。
3. 内在化された同性愛嫌悪への予防的介入や、他の当事者との安全な出会いを提供できる場の設置などの臨床心理学的支援の重要性を示したこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士 (心理学) の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 2 年 2 月 4 日